# 宮沢賢治文学における地学的想像力（三）
## ―〈まごい淵〉と〈豊沢川の石〉―

鈴木　健司

イーハトーブセンターの企画に「風のワークショップ・石っこ賢さんになって遊ぼう」というものがある。主に小・中学生を対象とし、実際に豊沢川の川原に行って石を拾い、その石の名前を、講師の先生から教えていただくという趣向である。賢治における岩石・鉱物に興味を持ちながらも体系的な知識を持てずにいた私は、子供たちにまじってそのワークショップに参加することを思いたった。講師は岩手県の岩石・地質に関して第一人者でいらっしゃる照井一明先生（理学博士・岩手県立不来方高校副校長）。あいにく当日は雨模様で、実際の石の採集は中止となったが、私は、宿泊先での朝の散歩がてら豊沢川にでかけ川原で石を十数個拾っておいたので、それらを照井先生に見ていただくことができた。また、照井先生は当日の雨天を予想して、参加者の人数分豊沢川の石を用意してくださっており、参加者は皆イーハトーブ館にて、詳しく説明を受けることができた。

以下の考証は、そのような小さな種から少しずつ育っていったものである。

### 一　「石っこ賢さん」の誕生

賢治が子供のころから石集めが好きだったことは知られているが、阿部孝（花巻出身・賢治の盛岡中学時代の親友・元高知大学学長）が、「四次元」第百号（昭34・1）に「中学生のころ」と題して載せた文章が、賢治の石好きを最も雄弁に語っているだろう。

中学時代における賢治の一番得意な学科は博物であった。当時は、博物という名前で、一年が鉱物、二年が植物、三年が生理、四年が動物を修めることになっていたが、その中でも、一年の時の鉱物と二年の時の植物とが、特に彼にはお手のもので、それらは彼にとって、趣味と学習とのみごとな結合だったともいえる。後年の彼の詩をふんだんにちりばめている、あの博学無双な鉱物の名称、植物の名称は、つまりその頃からの趣味と学習とのみごとな結合の成果であった。せんだんは二葉よりこうばしかったのである。

中学一年生の頃、遠足や郊外散歩に出かける時の彼の腰には、かならず愛用の金鎚が一ちようたばさまれていた。彼の詩によくでてくる七つ森、南昌山、鞍掛山、その他盛岡近在の山や岡で、彼のこの金鎚の洗礼を受けていない所はほとんどあるまい。こうして方々から集められた岩石の標本が、彼の机の上や抽出しから押入れの中までいつぱいに埋めていた。中学一年生であれだけ石に興味の持てる子供は、古今東西を通じて、あまり類がないかもしれない。あの調子でいったら、彼はおそらく第一級の地質学者にもなり得たであろう。だが、あのまま地質学の専門家になってしまうには、あまり彼の趣味が、関心が、そして世界が、広すぎたのである。

賢治の石好きが、すでに中学一年の段階でかなりのものであったことが

窺えるエピソードである。では、小学生のころはどうだったのだろうか。宮城一男の『宮沢賢治の生涯―石と土への夢―』（筑摩書房、昭55・11）によれば、典拠は明らかでないが、小学生時代から石好きであった賢治の様子が、次のように記されている。

賢治は、やはり、とくべつ石が好きだったのか、石拾いにはとくに熱心だったという。ほかの子供たちが石拾いにあきて別の遊びにうつっていっても、賢治は「ウン、もっと白い石をさがす」とか、「もっとすきとおった石をみつける」などといって、石拾いをつづけていたという。そんな賢治に、とうとういつのまにか「石ッコ賢コ」というあだ名がついてしまったのである。

このエピソードには少し検証しておきたいことがある。「もっと白い石」「もっとすきとおった石」という点である。豊沢川はその源を奥羽山系から発しており、後に具体的に豊沢川で採れる岩石を示すが、安山岩やデイサイト、流紋岩などの火成岩が中心で、たとえ白っぽい色であったとしても、それほど真っ白な石は期待できない。白っぽい凝灰岩（火山性堆積岩）がよく採れるが、おどろくほどの白さではない。一般に、白い石といった場合連想しやすいのはチャート（海底堆積岩）類である。たとえば、豊沢川の注ぐ北上川では北上山地側の石も流れ込んでおり、白を含む様々な色のチャートを採取することができる。ただ、豊沢川からチャート類を採取することはできない。「もっとすきとおった石」のことだが、真っ白なチャートでもそれほど透明感はない。基本の石英粒子が大きいためである。

豊沢川で「白い石」や「すきとおった石」が採取できる可能性があるとすれば、安山岩や流紋岩などに岩脈として入っている石英である。私も豊沢川でいくつか採取したが、多くはチャート程度の白さであった。ただ、その中の一つに瑪瑙（基本の石英粒子が非常に緻密）があり、それはまさに「すきとおった」感じの「白い石」であった。賢治が採ろうとした石と同じかどうか分からないが、豊沢川の上流の山のどこかに、玉髄や瑪瑙など「すきとおった」感じの石英系の脈が存在しているのは確かである。

さて、当時の小学校の授業では、岩石・鉱物についてどのような学習がなされていたか。あいにく私は賢治が小学生の頃の資料を持ち合わせていないが、小学校用の岩石・鉱物標本がすでに明治時代から販売されていたことは、島津製作所本部作成の明治三十六年の標本目録に、「小学校用」のものが記載されていることから明らかである。次に示す資料はおそらく昭和期に入ってからのものかと思われるが、日本鉱物教材社の標本では、「国定教科書準拠」と明示したうえで、四年で水晶・瑪瑙・石英・方解石・石灰岩・大理石・黄鉄鉱・黄銅鉱など、五年生で花崗岩・硫黄・石墨・石炭・コークス・磁鉄鉱・砂鉄など、六年で、石灰岩・安山岩・花崗岩・粘板岩・砂岩・礫岩・化石などが取りあげられている。教材用標本には、水晶・石英・瑪瑙・玉髄・方解石・・・四十二種が並べられており、この形式が一般的であったようである。他の会社の標本も大同小異であった。

文部省から最初に学校用鉱物標本作製をまかされた金石舎の明治の二十年代の広告文には「国ノ富強ハ天産ヲ利用スルニアリ」と記されており、鉱物や岩石の学習は、いわば国策に近いものであったことが窺われる。賢治ら子供たちが鉱物・岩石の学習をどう理解したかどうかは分からないが、鉱物・岩石に親しみやすい小学校時代をすごした可能性を考慮しておく必要がある。

賢治にとって、子供らしい石拾いが、鉱物・岩石採集へと本格化していったのは、阿部孝が回想するように盛岡中学に入り、博物（鉱物）を学んだことが契機となっているようだが、本稿では、賢治が始めて石を拾った、賢治の生家から程近い豊沢川に焦点を当て考察を進めていくつもりである。

## 二　豊沢川の石

照井一明先生のお話によれば、豊沢川で採れる石の種類は十種程度と考えてよいそうである。細かく分類すれば、種類はさらに増えることになるはずだが、細かく分類すればよいというものでもない。豊沢川の石の特徴は、火山活動の盛んな奥羽山系からのものなので、火成岩が圧倒的に多く、砂岩や泥岩、粘板岩、石灰岩、チャートといった海底に堆積して生成される堆積岩は見ることができない。ただし、堆積岩に分類される凝灰岩の場合は例外で、火山灰が湖底などに堆積してできたものであるため、目にすることも多い。変成岩であるが、奥羽山系は変成作用を受けた地帯ではないので、変成岩を見ることはない。

大きな分類で示すなら、安山岩、流紋岩、デイサイト、凝灰岩、礫岩、花崗岩、その他として、プロピライト（変朽安山岩）、岩脈としての瑪瑙、玉髄、石英岩、アプライト（細粒花崗岩）などが見られた。変わり種として、亜炭（炭化木）が含まれていた。

それから、同じ安山岩、または流紋岩といっても、色や形状のかなり異なるものが多く、含有鉱物や金属の違いが理由なのだが、見た目の異なりぐあいから分類した場合二十標本くらいにはなるはずである。採取した標本を本稿末尾にカラー版で提示した。特筆したいのは、豊沢御影と呼ばれる花崗岩で、かつては特産品として切り出されていたという。花崗岩を構成する鉱物の一つの長石が鮮やかな朱色をしており、その美しさには目を見張るものがある。カリウムを含むためである。豊沢ダム附近に産するが、ダムの建設や周辺の崖のコンクリート吹きつけなどにより、現在では露頭を見ることはむずかしくなっている。

採取した岩石の中に、本来、豊沢川にないはずのものが幾つか混じっていた。照井先生の鑑定では、斜長石斑レイ岩がその一つで、この石は北上山地系統のもので、豊沢川で採取された理由は分からないという。二つめはホルンヘルスで、この石は泥岩が変成作用を受けてできたもので、この石も本来的には豊沢川のものではないそうである。ただし、ホルンヘルスが豊沢川に混じり込んだ経路は予想がつくということであった。また、採取した中に花崗閃緑岩があったが、出所に疑問があり、豊沢川の石としては保留にしたいとのことであった。

なお、提示した豊沢川の石は数回にわたって採取したものである。採取場所だが、豊沢橋附近、石神地区附近、大沢温泉付近などである。

## 三　まごい淵

豊沢川の中流域の鉛温泉附近の大森山を調査していたときのことである。阿部勉さんという方と知り合い、「実は、私の母が実家が石神地区の出身で、宮沢賢治さんが豊沢川のまごい淵でよく泳いでいた」と話していた、という情報を下さった。勉さんのお母さんは〈阿部つや〉さんとおっしゃり、大正七年の生まれとのことである。豊沢川の「さいかち淵」の名

ならば、「風の又三郎」などでよく知られているが、実際の地名として存在しているわけではなく、おそらくは賢治の創作地名だと推定されている。では、「さいかち淵」のモデルはどこか、まずは、天沢退二郎編『新編　風の又三郎』（新潮社文庫、平元・2）の語注を見てみる。

**さいかちの樹の生えた崖**「さいかち」は、マメ科の落葉高木で、山野や川原にはえ、トゲが多い。この場所のモデルは豊沢川沿いの通称「カラゴヤ淵」で、樹齢数百年のさいかちの巨木が青ぐらい淵に影を落としていたという。（台風禍のため現存しない）

天沢によれば、「さいかち淵」のモデルは、地元で「カラゴヤ淵」と呼ばれるところだとの推定である。では、私の聞いた「まごい淵」は「カラゴヤ淵」とかかわりがあるのだろうか。この点は後に詳しく触れるが、「まごい淵」と「カラゴヤ淵」とはとても距離的に近いところにある。

原子朗著『新宮沢賢治語彙辞典』（東京書籍、東京書籍、平11・7）を見てみよう。

**さいかち【植】** 皂莢、さいかし、とも。マメ科の落葉喬木。山野、河原に自生し、茎・枝にとげがある。高さ約一〇m。葉は複葉、初夏に緑黄色のる花をつける。若芽は食用に、さや・豆果は薬用、古くは小袋等に入れて石鹸の代用にした。材は細工ものに愛用される。童［さいかち淵］があり、文語詩［職員室］に「藤をまとへるさいかちや」とある。藤のつるがからんでいるさま。なお、童［風の又三郎］の舞台とされる豊沢川の「さいかち淵」には、樹齢数百年と言われるさいかちの巨樹が数本、北側の崖下に並び立ち、辺りいっぱいに枝を広げていたと言う。

『新宮沢賢治語彙辞典』の説明には、「さいかち淵」のモデルに関しての具体的記述はない。ただ、かつて、さいかちの巨木の並び立つ崖があり、そこが「さいかち淵」のモデルだというように読める。〈さいかち淵〉とタイトルのついた川原の写真も掲載されている。しかし、具体的にそこがどこかを知ることはできない。

渡部芳紀編『宮沢賢治大事典』（勉誠社、平19・8）を見てみると、童話「さいかち淵」に関する解説はあるものの、「さいかち淵」のモデルを特定できるような記述はない。「豊沢川」の項に、「花巻市街地南西部石神のあたりは『さいかち淵』の舞台である」と記され、石神開町記念公園に「さいかち淵」の碑の建っていることが言及されている程度である。

上記の数種の解説の内容から窺えることは、創作地名としての「さいかち淵」に関して、それがどこであったかという実証的な調査研究が、これまであまりなされてこなかったということである。

「まごい淵」と「カラゴヤ淵」との関係、さらには、それらの「さいかち淵」のモデルとしての可能性など、この機会に少し明らかにしておきたい。

## 三　阿部義男氏の証言

『石神のあゆみ』（平17・11）という雑誌がある。石神町五十五周年記念として発刊されたものである。その第三章は、宮沢賢治と石神との関係

の記述から成っており、末尾の資料編も賢治関係のものである。


**第3章　宮沢賢治と石神**

1　宮沢賢治と石神町賢治ファンの聖地　阿部弥之……37
2　岩手県立花巻農学校の宮沢賢治先生　〃……37
3　宮沢賢治と石神町との深いつながり　〃……39
4　石の名前のことで賢治先生を知らず疑った私　阿部義雄……40
5　賢治の詩「塩水撰、浸種」は石神の山っこの詩　〃……41
6　阿部義男さんの素晴らしい賢治詩解説に一言　阿部弥之……43

**資料**

①若き賢治と農学校関連作品群……43
②当時、賢治先生はカラオケを歌っていた……44
③身照寺建立と、宮澤政次郎家墓所の移転について……45
④中山街道、花巻電気会社・電車「鉛線」……46
⑤岩手県立花巻農業高等学校、校舎見取図……48
⑥「宮沢賢治と石神」概念図……49
⑦作品「さいかち淵」……50


『石神のあゆみ』についてすでにご存知の方もいらしゃるであろうが、平成十七年十一月という比較的近年の刊行で、しかも町内誌の性格上小部数の発行でもあり、この機会に、本稿の論旨と直接的に関わる箇所に関しては、重複を恐れずに引用・紹介することにする。というのも、私がこの論考を含め、複数の論考の積み重ねより最終的に目指している、〈賢治作品における地学的想像力の問題〉を考えるための基礎的資料とも考えるからである。

## 4、石の名前のことで賢治先生を知らず疑った私

阿部義雄

大正十一年八月、私は九歳、小学校四年の夏休みで、豊沢川のまごえ渕で、近所の友達四人と水泳ぎにきていた時です。

あの時、賢治先生を知っておればこんな疑い、失礼はしなかったと思いますが、恐らく、あの時、私らを呼んだ小学校高等二年の小原忠さんも知らなかったと思います。

私ら渕から上って砂に転がっていた時、帰り道、川下の方で「ちょつとみんなおでェれ」と、小原忠さんが私らを呼んだのです。

その傍にもう一人の人がおりました。私らは「なんだべェ」と思いながら裸のまんま走っていったのです。

小原さんが「この人が石の名前を言うがら、なんたな石でもいいがら持ってきて」と言ったので、みんなは「はあ」といって手当り次第の石をその人の前に持っていぎ「この石なんて言うのす」「この石は？」とつぎつぎ持っていったのです。

私らはいつも白石、赤石、ごま石なんて言っていた石を、この人は何々岩、何々石と難しい名前でどんな石でも、すらすら答えるのです。

そうゆうむづかしい名前で言われても私ら分かる訳もないのですが面白半分で持っていったのです。むづかしい名前をあまり簡単に答えるので私は適当にいっているのではないが」と疑って、一度聞いた石

の名前を忘れないようにして暫くたっがら同じ石を持っていったのです。ところが前に聞いた同じ名前をちゃんと答えたのです。「よく分って答えているんだなァ」と、それで納得し感心したのです。

小原さんが「この人」といったので町から泳ぎにきていた人ぐらいにしか思っていませんでした。

そのうち私が持っていった石、形は忘れましたが、その石を見て「この石がここにあるのは不思議だ」とこの人は首をかしげ、小原さんや私たちに言いました。「どうして、ここにあるのか。この石は向こうからきた石だ」といって早池峯山の方を指さしていいました。

そして、その石に名前を書いたようでしたが、小原さんにその石をあげたように思いましたが、そのことについては思い出せません。「どこの石かも分かるなんて随分勉強のできる人なんだなあ」と更に私は感心したのです。

でも、その時、先生という名も聞かなかったし、そのまま別れました。

その方と小原さんはそこから帰りました。私らはその後、帰りましたが、私は初めこの人を疑ったことは恥かしいからみんなには言えませんでした。

「たまげだ人だっけなァ、なんでも覚えでいるっけなァ、博士でねェが、『ニドベ博士だべが』私は急に、この知識のある人に感動し、帰り道々、話しかげだ」みんなもそれに相づちしながら帰りました。

博士のような人がたまたま、様子を見に田舎にきていたのではと思ったりしたのです。その頃、博士と言えば物知りの人、ニトベ博士しか知らなかったのです。このことはそれっきりでした。

その後、大正十三年八月、私は小学校六年、近くに花巻農学校が建って、夜、この農学校に学芸会があることを農学生の小原忠さんの弟、秀雄さんから聞いたので、その晩四、五人の友だちと見にゆきました。それが又、いままで見たこともない面白い愉快なものでした。バナナン大将、種山ヶ原の夜、ボランの広場、植物医師などで、農学校の宮沢賢治先生を知ったのはその時からでした。

その後、先生は豊沢川まごえ渕にもたびたびきて泳いでもいましたし、石神の稲荷坂などでも会いましたが、石の名前を教えた人とは露知らず別人と思っておりました。

昭和八年、先生が亡くなってから小原思さんが石の名前のことを新聞に書いたのを見て初めてニトベ博士でなく宮沢賢治先生だったことを知ったのです。

そしてあの時、先生を疑ったことを後悔したものです。

その后、又四、五十年もたってから賢治先生は子供の頃から石集めがすきで石ッこ賢さんと呼ばれていた人だったと聞いて『全くその通り』と更に感動したのです。

あの頃、生意気にも先生を疑ったりして本当に済みませんでした。ご免なさい。深くお詫びします。

この阿部義男氏の思い出で重要なことは多々あるが、私は三つの点にだけ触れておきたい。まず一つめとして、宮沢賢治が泳いでいた場所は、豊沢川の「まごえ渕」（「まごい淵」とも）であったことである。『新編　風の又三郎』（新潮文庫）の語注に記されていたのは、「カラゴヤ淵」であり、「まごい淵」ではない。「カラゴヤ淵」で賢治が泳がなかったと主張

するつもりはないが、おそらくは「まごい淵」が中心だったろうと推定される。

二つめは、「まごい淵」や「カラゴヤ淵」附近には、〈さいかちの木〉はなかったということである。阿部義男氏の記憶では、ずっと上流の方にはあったということであった。モデルとしての〈さいかちの木〉の実在は、『新編　風の又三郎』（新潮文庫）の語注だけでなく、『新宮沢賢治語彙辞典』の解説でも述べられており、その点、もう少し詳しい検証が必要と思われる。

三つ目は、証言のうちの「そのうち私が持っていった石、形は忘れましたが、その石を見て『この石がここにあるのは不思議だ』とこの人は首をかしげ、小原さんや私たちに言いました。『どうして、ここにあるのか。この石は向こうからきた石だ』といって早池峯山の方を指さしていいました」の箇所である。「早池峯山」の方からきた石だとすると、北上山地系の岩石で、蛇紋岩か、橄欖岩の可能性が考えられる。写真には蛇紋岩を載せておいた。

## 四　阿部弥之氏の証言

「まごい淵」や「カラゴヤ淵」と「さいかち淵」との関係や、川岸に〈さいかちの木〉はなかったという点に関し、補足の意味で、阿部弥之氏の文章を次に紹介しておきたい。阿部氏は　昭和二十一年生まれ、花巻農業高校で先生をなさっていたことがあり、また、宮沢賢治学会イーハトーブセンター理事もなさり、特に地元の視点から賢治研究にご尽力下さっている。

### 3、宮沢賢治と石神町との深いつながり

阿部弥之

**①　宮沢先生が活躍した花巻農学校がありました**

当時としては、高度で斬新な内容の農業教育と自作劇の上演や性教育までも行ったユニークな教育者、宮沢賢治先生は大人達からは「奇体な」人と言われながらも熱心に生徒達を指導しました。大正十五年三月三十一日付で退職するまでこの地に通いました。

「この一巻はわたくしが岩手県花巻の農学校に勤めておりました四年のうちの終わりの二年の手記から集めたものです。この四ケ年はわたくしにとって、じつに愉快な明るいものでありました」（『春と修羅』・第二集』序）

**②　この学校の近くの神社に友人、阿部孝の家がありました**

阿部孝は鼬幣稲荷神社宮司、阿部有孚（ゆうふ）の長男でした。旧制一高から東大文学部、英文学（演劇学）を学び、旧制高知高校の教授、後には高知大学学長になりました。賢治はこの友人の東京での下宿の書架から萩原朔太郎の「月に吠える」を取り出して、「不思議な詩だなあ」と言って、自らも詩作を始めたと云われています。（詩『地蔵堂の五本の巨杉が』「寛の名高い叔父、いま教授だか校長だかの　国士卓内先生も」の鈴木卓苗氏の生家も近い。「寛」とは、教え子桜羽場寛。）

**③　盛岡中学校先輩、阿部千一、末吉の家がありました**

盛岡中学校で二年先輩の千一、一年先輩の末吉は、中根子、駒込で、

すぐ近くにあった。二人は寮でも一緒だった。

阿部千一の父、阿部　晃（ちょう）は熱心な仏教徒で教育者であり、花巻尋常高等小学校教師や湯口村の村長を永年勤めた。

千一は、戦前は朝鮮総督府に勤め、慶尚南道の知事をした。戦後、初の民選国分県知事の時、副知事をした。一九五五（昭和三〇）年から二期、県知事を勤めた。千一は賢治の四歳年長で花城高等小学校、盛岡中学校先輩であった。

**④「風の又三郎」の一部となる「さいかち淵」の舞台がありました**

石神の男の子僕たちは、夏の水浴び（水泳・川遊び）は「馬越え淵」（まごい、真鯉）という豊沢川の右岸で遊ぶのがいつものことでした。花巻農学校からこの淵までの道筋には私の記憶でも直径一メートルを超える「さいかちの巨木」が四～五本は有りました。まず、滝ノ沢川の右岸の阿部憲義さんの家の脇です。その少し先の嘉八ドへの入り口付近、直ぐ、左手前方、治右衛門ド（ずいもんど）の屋敷の縁、その直ぐ右手前方、川原へと下る坂の途中、理八どの屋敷の端にありました。その四本の巨木は兄弟の様に、二十メートル以内の道筋にそれは見事に聳えていました。

昭和十六年、島　耕二監督の映画「風の又三郎」のロケ地として、この淵と中根子の「川原小屋（からこや）淵」が使われたそうです。

「お、おれ、先に叫ぶから、みんなあとから、一二三で叫ぶこだ。いいか。あんまり川を濁すなよ、いつでも先生云うでないか。」

（「さいかち淵」）

阿部弥之氏の証言（含調査）で特に重要なのは、「石神の男の子」は「まごい淵」で遊ぶのが通例だったという点である。資料⑥「『宮沢賢治と石神』概念図」（阿部弥之氏作成）をあわせて見ると分かりやすいが、豊沢川「右岸」の「まごい淵」とは、石神地区から見て、川の向こう岸、つまり南岸にあるのである。そのため、石神の子供たちは川原を北側から南側に渡る必要がある。現在の豊沢川は流れが中央寄りになったため、かつての「まごい淵」は川原となり、木も茂ってしまっているという。阿部弥之氏から直接うかがったことである。また、昭和の三十年代まで遊び場として存在していた「まごい淵」は、南岸の崖下の淵であり、崖上から飛び込んだりして遊んだのだそうである。豊沢ダムの完成が昭和三十六年であるから、ダムによる水量調整が、川の勢いを衰えさせ、「まごい淵」や「川原小屋（からこや）淵」を消滅させることになったのであろう。

さらに、「まごい淵」は石神地区の子供たち専用の遊び場であり、石神地区の子供たちは「川原小屋（からこや）淵」で遊ぶことは、決してなかったそうである。子供たちの間に一種の縄張りがあり、「川原小屋（からこや）淵」は中根子地区の子供たちの遊び場だったそうである。

ここで、童話「さいかち淵」での、〈さいかち淵〉への経路を確認してみる。テキストには、「石神の庄助」とか「煉瓦場の人たち」とあるから、子供達のモデルは明らかに、豊沢川北岸の〈石神地区〉の子供達と考えてよいだろう。まずは〈さいかち淵〉への〈往路〉だが、

ぼくらは、蝉が雨のやうに鳴いてゐるいつもの松林を通って、それから、祭りのときの瓦斯のやうな匂のむっとする、ねむの河原を急い

で抜けて、いつものさいかち淵に行った。

とある。石神地区から南に向かって歩き、川に着く。そして河原におり、向かい側まで渡り、〈さいかち淵〉に着いたと、読めるだろう。〈復路〉、は次のようである。

その人は、あわてたのをごまかすやうに、わざとゆっくり、川をわたって、それから、アルプスの探検みたいな姿勢をとりながら、青い粘土と赤砂利の崖をななめにのぼって、せなかにしょった長いものをぴかぴかさせながら、上の豆畠へはひってしまった。ぼくらも何だか気の毒なやうな、をかしながらんとした気持ちになった。そこで、一人づつ木からはね下りて、河原に泳ぎついて、魚を手拭につつんだり、手にもったりして、家に帰った。

「その人」とは、子供達にとって謎の大人で、「その人」は崖を登っていったとあるから、子供達の帰る石神地区とは逆の南の方向に川を渡っていったことになる。石神の子供達は、崖のさいかちの木から、〈さいかち淵〉に飛び込み、河原にあがり、河原を北方向に横切り、石神地区に戻っていったと考えられる。

このように、作品「さいかち淵」に描かれる〈さいかち淵〉と、阿部義男氏や阿部弥之氏の記憶する「まごい淵」とを重ね合わせてみると、かなりの一致を確認することができる。その点、「川原小屋（からこや）淵」を〈さいかち淵〉のモデルに想定した場合、崖の存在や、河原を渡る、という行動がモデルとして付合しなくなってくる。

ただ、作中の〈さいかち淵〉が、現実の「まごい淵」からすっかりそのまま再現されるかというと、そのようにはなっていない。まず、崖にさいかちの木がないので、「まごい淵」で遊ぶ子供達は木から淵に飛び込むことができない。その点、「川原小屋（からこや）淵」には、近くに欅の木があったそうで、欅の木が曲がっており、そこから淵に飛び込んでいたとのことである。その意味では、「川原小屋（からこや）淵」もまた、〈さいかち淵〉のモデルとして生かされていたと、推定することができる。

実際の石神地区付近の豊沢川に行ってみると、河原（道地橋から下流へすぐ・北岸）に「まごい淵」と書かれた、木を組んだ大きな看板のようなものを目にすることになる。注意してほしいのは、そこは「まごい淵」ではないことである。どちらかといえば「川原小屋（からこや）淵」にあたるところに立てられている。その河原の箇所は私有地のため、土地の所有者が、賢治生誕100年のころ自主的に立てたのだそうである。

最後になるが、阿部勉さんにお礼を申し上げておきたい。母堂「つや」様のご記憶から、「まごい淵」という私にとって未知であった名が賢治と結びつき、調査を進めるうちに、〈さいかち淵〉に関する先行研究への疑義や補足を提出することができ、本稿も少しは論文らしくなることができた。石神の阿部義男氏（現在は中根子在住）、阿部弥之氏にも資料を提供していただいたり、直接質問に答えていただいたり、大変にお世話になった。阿部つやさんのご実家が、阿部義男氏の隣ということも分かり、私自身の研究者としての運のよさをあらためて感じることとなった。岩石の鑑定に関し全面的のご協力いただいた照井一明氏にも深くお礼を申し上げなければならない。

付記

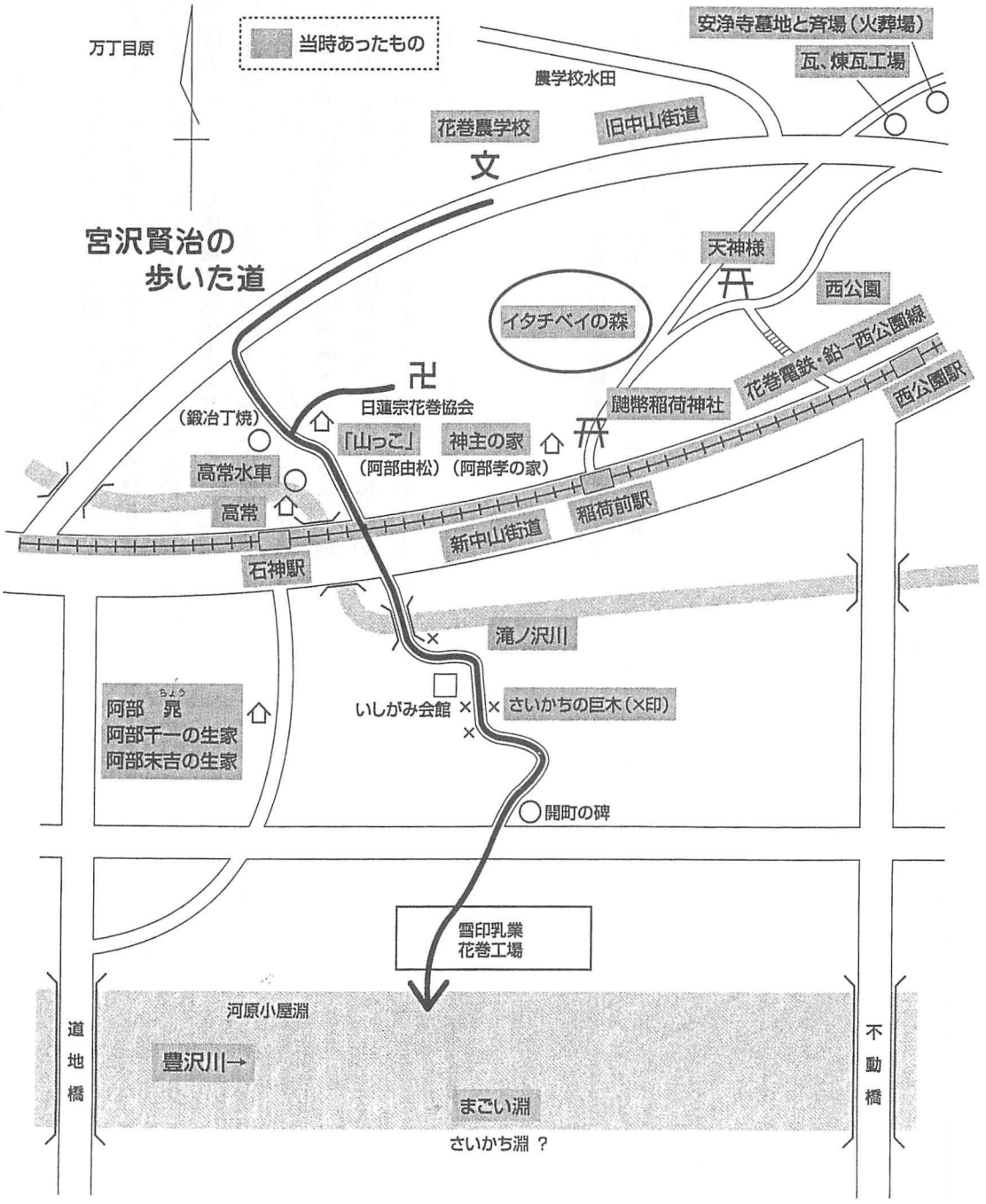
本稿は、「宮沢賢治文学における地学的想像力（一）―基礎編・珪化木（Ⅰ）及び瑪瑙―」「文学部紀要」第21-2号（文教大学文学部、平20・3刊行予定）や、「宮沢賢治における地学的想像力（二）―基礎篇・珪化木（Ⅱ）―」「言語と文化」創立20周年記念号（文教大学附属言語文化研究所、平20・3刊行予定）に続くもので、今後予定されている「宮沢賢治文学における地学的想像力(四)―応用編・ジャータカと地学―」（発表誌未定）を含め、<地学的想像力>という視点から執筆中の一連の論文の一パートをなすものであることをお断りしておきたい。

※　編集より

鈴木健司先生は二〇〇六年度より高知大学から埼玉県の文教大学に着任されています。今回お忙しい中にも関わらず、大変感謝しております。ありがとうございました。

資料⑥

# 「宮沢賢治と石神」概念図



# 豊沢川の石

安山岩①

安山岩②

安山岩③

流紋岩①

流紋岩②

流紋岩③

流紋岩④

流紋岩⑤

凝灰角礫岩①

凝灰角礫岩②

凝灰角礫岩③

軽石凝灰岩①

デイサイト①　デイサイト②　デイサイト③

プロピライト（変朽安山岩）　花崗岩（豊沢御影）①　花崗岩（豊沢御影）②

メノウ（安山岩中）　石英岩（岩脈）　亜炭

＊斜長斑レイ岩　＊ホルンヘルス　＊蛇紋岩